

円珍の位記・智証大師諡号勅書と唐の告身

丸山裕美子

A Comparative Study of Priest Enchin's 円珍 Ichi 位記 and Tang Gaoshen 告身

MARUYAMA Yumiko

はじめに

- ① 唐公式令制授告身式と日本公式令勅授位記式
 - ② 唐の勅授告身式と日本の五位以上位記式
 - ③ 円珍の位記（その1）
 - ④ 円珍の位記（その2）
 - ⑤ 諡号勅書
- おわりに

【論文要旨】

日本の古代律令国家の公文書は、中国・唐の文書制度や文書の機能・様式を継受して成立した。日本古代の公文書の成立と展開に関して、本稿では、「位記」を中心に検討した。日本の位記は、唐の「告身」を継受したものである。身分証明書である位記・告身は、原本も残っており、古文書の国際比較や時代による変遷を追うことが可能な素材である。

本稿では、従来の位記研究において等閑視されてきた僧の位記について、唐の告身と比較しつつ考察を加えた。まず従来の位記・告身研究を踏まえ、弘仁九年（八一八）に改定された位記の書式が、唐の告身の「かたち」に近づけたもので、それが『延喜式』五位以上位記式に定着したことを確認した。書式の変更には、延暦の遣唐使が持ち帰った唐の告身が影響を与えた可能性がある。そして日本の五位以上位記式Ⅱ勅授位記式は、唐の制授告身式に倣っていること、『延喜式』僧綱位記式が、唐の勅授告身式に準拠していることを述べた。

ついで、園城寺（三井寺）蔵の円珍の一連の位記が、位記の原本として日本最古であることに着目し、それらが『延喜式』判授位記式、僧尼位記式、延暦寺位記式と一致することを確認した。僧尼位記式、延暦寺位記式は、「可某位」ではなく、「授某位」の書式をとる。また「中務位記」は円珍が入唐にあたって特別に用意したもので、そのため唐の勅授告身式に倣った書式をとっていることを指摘した。

東京国立博物館蔵の円珍贈法印大和尚位并智証大師諡号勅書もまた位記である。近年、その書式に疑問が出されたが、印の捺し方や官位署の書き方など、「かたち」は唐代の勅授告身と一致し、古文書学的にはまぎれもなく位記の書式である。日本の古文書だけをみていたのでは思わぬ誤りに陥ってしまう。中国を中心とする東アジアの古文書との比較研究、とくに、文書原本の比較研究が必要である所以である。

【キーワード】公式令、延喜式、円珍位記、円珍贈法印大和尚位并智証大師諡号勅書、唐の告身

はじめに

日本の古代律令国家の公文書は、中国・唐の文書制度や文書の機能・様式を継受して成立した。そうした日本古代の公文書の成立と展開に関して、本稿では、「位記」を中心に検討してみたい。

日本古代の位記が、中国の告身（誥命）の書式に倣っていることは、夙に伊藤東涯『制度通』（一七二四年）が指摘するところである。⁽¹⁾さらに二十世紀前半の神田喜一郎、内藤乾吉、仁井田陞、瀧川政次郎らによる検討を経て、大庭脩によつて網羅的かつ包括的な考察が加えられている。⁽²⁾

告身も位記も官僚の身分証明に関わる文書であり、ともに公式令に書式が規定され、皇帝権力と君臣関係、官僚制の構造、あるいは歴史的・政治的背景などをうかがうには恰好の史料である。加えて、唐・宋の告身、日本の位記が現存し、最近では南宋の告身がオークションに出品されている小島浩之や趙晶らが指摘するように、⁽⁴⁾告身・位記は、古文書の国際比較や時代による変遷を追うことが可能な素材である。本稿で、告身・位記を取り上げる所以である。⁽⁵⁾

ところで、日本の位記を検討する際に、これまでの研究では、僧侶の位記、具体的には円珍の位記について詳細な考察が加えられたことはほとんどない。もちろん存在は指摘されているのだが、僧侶の位記ということもあって、特殊なものともみなされてか、位記として本格的な検討がなされてこなかったのである。しかし、位記の原本としては、まさしく最古のものであり、また時期をかえて複数残っていることから、日本の位記の書式を考えるのに極めて貴重な史料なのである。

円珍の位記は、伝燈大法師位記・伝燈法師位記・伝燈満位記・伝燈住位記の四通一巻と「中務位記」とも称される綾本の伝燈大法師

位記、及び法眼和尚位記の計六通が園城寺（三井寺）に所蔵され、別に円珍に法印大和尚位を贈位し、智証大師の諡号を賜与した際の勅書「円珍贈法印大和尚位并智証大師諡号勅書」（以下、「諡号勅書」と称す）が東京国立博物館に所蔵されている。⁽⁷⁾後者の「勅書」は、書式にも明らかのように、「位記」である。

諡号勅書は、小野道風の書として著名なものでもあるが、近年、湯山賢一は、古文書学的な検討を加えて、「位記文書として本来持つべき性格を有するものではない」という結論を導かれている。⁽⁸⁾この結論―古文書の書式としてはありえず、小野道風の書ではなく、後世の臨書であるとする―は、マスコミでも大きく取り上げられた。⁽⁹⁾しかしながら、唐・宋代の告身と比較すれば、古文書学的にはまさしく位記の書式であることが明らかである。

本稿では、円珍の位記を検討するにあたって、まず前提となる日唐の公式令に定める唐の告身と日本の位記について、先行研究に基づいて基本的な事項を確認し、さらに日本の位記についての変遷を明らかにした上で、円珍の位記と諡号勅書について、考察を加えることにしたい。なお、本稿では、史料の文字は原則として新字体を用いるが（「圓珍」↓「円珍」、「智證」↓「智証」など、ただし「伝燈」を使用）、できるだけ書式が正確に伝わるように、文字の大きさや字配りに配慮した。また、書式の比較がしやすいよう、読点は付すが、一部返り点を付さない場合がある。

① 唐公式令制授告身式と日本公式令勅授位記式

敦煌写本の唐公式令断簡（P.3816）^{ベリオ}には、移式・関式・牒式・符式とともに、制授告身式と奏授告身式の一部が残されている。⁽¹⁰⁾『唐令拾遺』『唐令拾遺補』に開元七年令として復原されている制授告身式は以下の

通りである。^①

制授告身式

門下、具官封姓名、（依不称姓者、依別制冊書亦准此）德行庸勲云々、

可某官、（若有勲官封、及別兼帶者、云某官及勲官封如故、其非貶責、漏不言勲封者、同銜授法）主者施行

（若制授人数多者、並於制書之前名歷名件授）

年月日

中書令具官封臣姓名宣

中書侍郎具官封臣姓名奉

中書舍人具官封臣姓名行

侍中具官封臣名

黃門侍郎具官封臣名

給事中具官封臣名 等言

制書如右、請奉

制付外施行、謹言

年月日

制可

月日 都事姓名受

左司郎中付某司

左丞相具官封名

右丞相具官封名

吏部尚書具官封名

吏部侍郎具官封名

吏部侍郎具官封名

左丞具官封名

（其武官、則右丞署、若左右丞内一人無、仍見在者通署）

告具官封姓名、奉被

制書如右、符到奉行

主事姓名

吏部郎中具官封名 令史姓名

書令史姓名

年月日下

右、制授告身式、其余司應授^レ官爵^一者、准^レ之

この制授告身式と、告身の実例によって、制授告身の発給手続きを確認しておく。便宜①～⑤に分けておく。

①まず、皇帝の意向を受けて、中書省が制詞起草し、中書令・中書侍郎・中書舍人がそれぞれ署名し、宣・奉・行を記して、門下省に送付する。

②次いで、門下省（侍中以下）で審議し、問題があれば差し戻し（封駁）、問題がなければ侍中・黃門侍郎（後には門下侍郎）・給事中が署名（簽書）して、皇帝に覆奏する。

③皇帝の「可」（御画可）を受けると、これを案としてとどめ、写しをつくって、侍中が「制可」と注した制書を尚書省に送付する。

④尚書都省の都事が受理し、左司郎中（尚書都省）が担当部門（吏部の司勲司など）に付す。

⑤尚書省の丞相以下と吏部の官人が署名し、「告具官封姓名、奉被制書如右、符到奉行」の文言を加え、原本はとどめて案とし、写しを尚書省符（尚書吏部符）として当人に発給する。

ここで確認しておきたいのは、最終的に発給される尚書省符は写しであるということである。①で中書省の官人が署名し、②で門下省の官人が署名し、③で皇帝が「可」を自署するが、この原本は門下省にとどめられる。⑤の段階では、尚書省の丞相以下が署名を加えるが、これがそのまま発給されるわけではなく、その謄写が作成されるのである。

唐の官爵除授は、『通典』卷一五選舉典歴代制などによれば、冊授（諸王・職事正三品以上、文武散官二品以上、都督都護上州刺史の在京

者、制(詔)授(五品以上)、勅授(六品以下守五品以上、視五品以上)、奏(旨)授(六品以下の流内官)、判補(流外官)の五種の形式があったことが知られる。公式令にはこのうち、制授告身式と奏授告身式、及び判授告身式のみを規定しており、冊授告身式と勅授告身式の規定はなかった。冊授は制授の形式で与えられ、その後冊礼が行われたと考えられ、勅授は発日勅を準用したと考えられている⁽¹²⁾。

なお、後述のように、唐の告身の実例として残るものは、勅授告身が多い。開元四年(七一六)六月十九日勅に「六品以下官、令_三所司補_三授員外郎・御史、併余供奉、宜_レ進_三名勅授_一」(『唐会要』卷七五選部下)とあって、勅授の対象が六品以下の官にも拡大されたことや、制授が特殊な官職に限られてくることによるらしい。

一方、日本の養老公式令においては、内外五位以上に対する勅授位記式(公式令16条)、六位以下内八位・外七位以上に対する奏授位記式(公式令17条)、外八位・内外初位に対する判授位記式(公式令18条)が規定されていた⁽¹³⁾。『続日本紀』大宝元年(七〇一)三月甲午条には、「始依_三新令_一、改_三制官名位号_一……始停_レ賜_レ冠、易以_三位記_一」とあり、「新令」_二大宝令_一によって、冠の賜与から位記の授与への変更がなされたと考えられる。もともと、『日本書紀』持統三年(六八九)九月条に筑紫への「位記」の送付がみえ、同五年二月条にも「授_三宮人位記_一」とあるから、持統三年六月に諸司に班賜された飛鳥浄御原令において位記が制度化され、大宝令によってこの規定が徹底されることになったとみるべきであろう。

日本の勅授位記式が唐の制授告身式に、奏授位記式が唐の奏授告身式に、判授位記式が唐の判授告身式にそれぞれ対応しているわけだが、実際には日本令と唐令の規定する書式は大きく異なる。勅授位記式をみてみよう。

勅授位記式

中務省

本位姓名 年若干 今授其位

年月日

中務卿位姓名

太政大臣位姓 大納言加名

式部卿位姓名

右、勅授五位以上位記式、皆見在長官一人署、若長官無、則大納言及少輔以上、依_レ式署 兵部亦同、以下准_レ之

唐の制授告身式に比して、極めて簡略である。まず制詞(勅詞)にあたるものが無い。中務省・太政官・式部省(武官の場合は兵部省)の長官のみが署名し、しかも本条の『令集解』『古記』が引用する「八十一例」には、「位記署名者、不_二必自署_一也」とあるから、おそらく大宝令施行直後から、長官が署名する必要はなかった。叙位に関わる官司による極めて事務的な手続きで発給され、勅授と称しつつ書式からは天皇の意向が確認できない。もちろん、位記は中務省の内記が天皇の意向を受けて作成し(養老職員令3中務省条及び公式令本条集解「穴記」、五位以上位記には内印_二「天皇御璽」が押される(養老公式令40条)。大宝令では、この勅授位記式の末尾に「以_二内印_一印之」とあった可能性が高く、後の儀式書などに記される「位記請印」の儀礼をもって、天皇の意向が示されることになる。なお、六位以下位記には外印_二「太政官印」が押された(養老公式令40条)。

奏授位記式・判授位記式も、復原される唐の奏授告身式・判授告身式とは異なり、簡略な書式である。しかし、この位記の書式は、九世紀には大きく変化する。この書式の変化については、すでに多く論じられているところではあるが、以下、章をあらためて検討を加えてみたい。

②唐の勅授告身式と日本の五位以上位記式

唐の告身については、敦煌・トルファン文書に実例が残っていることもあって、多くの貴重な先行研究がある。とくに大庭脩や中村裕一による研究の整理と個々の告身の詳細な検討を参照しつつ、以下に勅授告身の書式について確認しておこう。⁽¹⁶⁾

唐の告身は、制詞（勅詞）部分は『文苑英華』や文集類などに多くみえるが、文書の書式、発給手続きの部分を含めて残るものはそう多くはない。顔真卿の真筆として知られる台東区立書道博物館所蔵の建中元年（七八〇）顔真卿勅授告身や、徐浩筆とされる台北の国立故宫博物院所蔵の大暦三年（七六八）朱巨川勅授告身などは、著名な書家の書として伝世したものである。法帖のなかに、中村裕一が紹介した『忠義堂帖』所収の五種の顔氏告身などがあり、また臨川公主墓出土の二種の石刻告身のように石碑として残ったものもあるが、数は少ない。敦煌・トルファン文書のうちには、乾封二年（六六七）汜文開詔授告身（P.371v）、長寿二年（六九三）張懷瓘制授告身（大谷 1062 + 大谷 2833）、天宝十四載（七五五）秦元制授告身（^{スライ}S.3392）など、首尾が比較的よく残ったものがある。これまでに知られるところの唐の告身を一覧にまとめると表のようになる。大庭脩・中村裕一・徐暢らが紹介した告身に、旅順博物館所蔵の断簡を加えた。⁽¹⁷⁾

先行研究が指摘するように、八世紀半ば玄宗朝まではほとんどの例が制（詔）授告身であるが、肅宗朝以降、勅授告身が増加する。先にみた開元四年（七一六）の勅授の範囲拡大の影響や、制授が特殊な官職に限られてくること、開元二十六年の翰林学士の設置により制勅詞の起草機関が二つに分かれたことなどによると考えられている。⁽¹⁸⁾

その勅授告身の書式は、唐公式令には規定がなかったと考えられる

が、実例から書式が復原されている。大庭脩による書式の復原案がすでに提示されているが、あらためて朱巨川勅授告身や、『不空三藏表制集』卷一に載せる永泰元年（七六五）金剛三藏勅授告身などを参考に復原すると、次のようになる。大庭脩案を一部修正した。

勅授告身式

具官封姓名

右可某官

勅云々、可依前件

年月日

中書令具官封臣姓名宣

中書侍郎具官封臣姓名奉

中書舍人具官封臣姓名行

奉

勅如右、牒到奉行

年月日

侍中具官封名

門下侍郎平章事具官封名

給事中具官封名

月日時 都事姓名

左司郎中付吏部

吏部尚書具官封名

吏部侍郎具官封名

吏部侍郎具官封名

尚書左丞具官封名

告具官封姓名、奉

勅如右、符到奉行

表 唐代の告身一覧

発給年	西暦	氏 名	官 爵	告身	所蔵または出典 *注	備 考
武德 4	621	汪華	越国公	詔授	【北京図書館蔵中国歴史石刻拓本匯編】11	拓本
貞觀 15	641	李孟姜	臨川郡公主 (正一品) *太宗 12 女	詔授	【昭陵碑石】(三秦出版社, 1993 年)	石刻
永徽 1	650	李孟姜	臨川郡長公主 (正一品) *太宗 12 女	詔授	【昭陵碑石】(三秦出版社, 1993 年)	石刻
乾封 2	667	郭伯驥	典官・護軍 (從三品)	詔授	【吐魯番出土文書】6-504 ~ 507 頁	謄本
乾封 2	667	汜文開	典官・上護軍 (正三品)	詔授	【フランス国立図書館蔵, P.3714v	謄本
上元 2	675	和氏	容城果太君	奏授	【補編超田蔵 *龍谷大学には入らず	謄本 邑号
永淳 1	682	汜德達	典官・飛騎尉 (從六品)	令書	【吐魯番出土文書】7-221 ~ 223 頁	皇太子監国
650 - 690		令狐懷寂	典官・護軍 (從三品)	詔授	ギメ美術館蔵, E.O.1208	竹帛下貼, 【尚書吏部之印】あり
長寿 2	693	張懷寂	中散大夫 (正五品上) 行茂州都督府司馬 (從五品下)	詔授	龍谷大学蔵, 大谷 1062 + 大谷 2833	謄本
延載 1	694	汜德達	典官・輕車都尉 (從四品)	詔授	【吐魯番出土文書】7-224 ~ 227 頁	謄本
万歲通天	696	某		詔授	【敦煌莫高窟北区石窟】1	謄本
聖曆 2	699	汜承徽	昭武校尉 (正六品上) 行左衛羽林軍府別將員外郎同正員上柱国	詔授	【フランス国立図書館蔵, P.3749v	拓本
神龍 2	706	某		詔授	【北京図書館蔵中国歴史石刻拓本匯編】11	謄本
景龍 2	708	□文楚	陪戎校尉	詔授	【敦煌莫高窟北区石窟】1	拓本
景雲 2	711	張君義	典官・驍騎尉 (正六品)	奏授	敦煌文物研究所蔵, 0341	皇太子監国 (啓授?) *関連文書が天理図書館にあり
開元 2	714	顔元孫	使持節滁州諸軍事滁州刺史 (從三品)	詔授	【忠義堂帖】下	広徳 2 年 (764) 再発給
開元 4	716	李慈芸	典官・上護軍 (正三品)	詔授	大谷将来, 不明 *小田論文写真紹介	原本 【尚書司勳告身之印】あり
開元 20	732	李暹	汾州刺史 (從三品)	詔授	【秘書録話】巻下	
開元 22	734	張九齡	銀青光祿大夫守中書令 (正三品)	詔授	【淳熙秘閣線帖】巻 6	
開元 23	735	某	典官	詔授	【フランス大学蔵, 【吐魯番文書總目 (欧美収蔵巻)】	
開元 29	741	張懷欽	典官・騎都尉	詔授	【フランス国立図書館蔵, P.2547	印あり
天寶 10	751	張無師	游擊將軍 (從五品下) 守左武衛同合都夏集府折衝都尉員外郎同正員上柱国	詔授	【吐魯番出土文書】10-2 ~ 5 頁	謄本
天寶 14	755	蔡元	典官・騎都尉 (從五品)	詔授	【テイクシエ・ライフラーリ一蔵, S.3392	【尚書司勳告身之印】あり
乾元 1	758	顔昭甫	贈華州刺史 (從三品)	詔授	【忠義堂帖】下	贈官
宝応 1	762	顔惟貞	贈秘書少監 (從四品上)	詔授	【忠義堂帖】下	贈官
宝応 1	762	顔允南母殷氏	贈蘭陵郡太夫人	詔授	【忠義堂帖】下	贈邑号
永泰 1	765	金剛三藏	贈開府儀同三司 (從一品), 号大弘教三藏	詔授	【不空三藏表制集】巻 1	贈官
永泰 1	765	不空三藏	特進 (正二品) 試鴻臚卿, 号大弘智不空三藏	詔授	【不空三藏表制集】巻 1	原本 伝徐浩筆
大曆 3	768	朱巨川	試大理評事(從八品下)兼蒙州鎮撫使(從六品下)	詔授	台北・国立故宫博物院蔵	
大曆 9	774	不空三藏	開府儀同三司 (從一品) 東国公食邑三千戸	詔授	【不空三藏表制集】巻 4	贈官
大曆 9	774	不空三藏	贈司空 (正一品), 諡号大弁正広智不空三藏和上	詔授	【忠義堂帖】下	原本 【尚書吏部告身之印】あり
大曆 13	778	顔真卿	刑部尚書 (正三品)	詔授	所在不明 【書道】9-2	
大曆 14	779	張令曉	守資州磐石県令 (正七品上)	詔授	【江西出土墓誌選編】	石刻 贈官
建中 1	780	顔真卿	贈太子太傅 (從一品)	詔授	台東区立書道博物館蔵	原本 顔真卿自筆
建中 1	780	顔真卿	光祿大夫守太子少師 (從二品) 充礼儀使	奏授	【金石萃編】巻 102 / 【停雲館法帖】	伝顔真卿筆
建中 3	782	朱巨川	朝議郎 (正六品上) 行起居舍人 (從六品上) 試知制誥	詔授	【金石萃編】巻 102 / 【停雲館法帖】	
元和 1	806	高階遠成	中大夫 (從四品下) 試太子中允 *日本国遣唐使判官	詔授	【朝野群載】巻 20	
会昌 2	842	李紳	守中書侍郎 (正四品上) 同中書門下平章事	詔授	【梅溪居士縮臨唐碑】*錢泳 (1759 ~ 1844)	
大中 5	851	洪辯	京城内外監廩供養供奉大德	詔授	敦煌石窟 163 窟外壁	石刻
咸通 2	861	范昉	典官・柱国 (從二品)	詔授	【金石萃編】巻 117 / 【梅溪居士縮臨唐碑】	
?	?	某	告身	詔授	旅順博物館蔵, 【旅順博物館蔵西成文書研究】1480-4-6	

* 注：伝世告身は所蔵機関を，出土告身は所蔵機関と文書番号または録文の収録された書籍を，法帖収載告身は法帖名を記している

主事姓名
 吏部郎中具官封名
 令史姓名
 書令史姓名
 年月日下
 一方、日本の『延喜式』内記14五位以上位記式は以下の通りである。¹⁹⁾
 五位以上位記式
 某位姓名
 右可某位
 中務云々、可依前件、主者施行
 年月甲日
 中務卿位臣姓名宣
 中務大輔位臣姓名奉
 中務少輔位臣姓名行
 大納言位臣名
 大納言位臣名
 中納言位臣名
 中納言位臣名
 中納言位臣名
 中納言位臣名
 等言
 制書如右、請奉
 制付外施行、謹言
 年月乙日
 制可 月丙辰時
 大外記姓名
 左中弁名
 左大臣位朝臣
 右大臣位朝臣

式部卿位名
 式部大輔位名
 左大弁位名
 告某位姓名、奉
 制書如右、符到奉行
 大録名
 少録名
 少録名
 年月丁日下
 右、文官位記式如_レ件、命婦位記亦同、但武官位記、以_二兵部_一
 代_二式部_一、以_二右弁_一代_二左弁_一
 一見すると、唐の勅授告身式に似ているようにみえるが、大納言・中納言による覆奏部分があつて、前節で示した唐の制授告身式に依っていることがわかるであろう。公式令16勅授位記式には記されなかった発給手続きにあたる部分が唐制に倣つて規定され、与えられる位について、「今授其位」という表記であつたものが、「右可某位」という表記に代わっている。
 この書式から復原される五位以上位記の発給手続きを、先の制授告身にならつて、便宜①～⑤として整理してみよう。
 ①天皇の意向を受けて、中務省の内記が勅詞を起草し、中務卿・中務大輔・中務少輔がそれぞれ署名し、宣・奉・行を記して、大納言以下の議政官に送付する。
 ②大納言・中納言が署名して、天皇に覆奏する。
 ③天皇の「可」（御画可）を受けると、これを案としてとどめ、写しをつくつて、大納言が「制可」と注した勅書を太政官に送付する。
 ④太政官の大外記が受理し（時刻）、文官の場合は左中弁（武官の場合

合は右中弁）が式部省（武官の場合は兵部省）に付す。

⑤左右大臣と式部省の官人が署名し、「告某位姓名、奉制書如右、符到奉行」の文言を加え、原本はとどめて案とし、写しを式部省符として当人に発給する。

しかしながら、この①～⑤の発給手続きは、実態に即していない可能性が高い。そもそも日本の大納言は唐の門下侍中を参考にして設けられたとされ、実際、大納言が門下侍中、中納言が黄門侍郎の唐名をもっていたが、唐の門下省が制勅の審議・封駁を行っていたとは異なり、大臣とともに「参議庶議」（職員令2条）する存在であった。であるから、②大納言が審議の後、③～⑤大臣に施行を命じるというのは本来ありえない。つまり、この書式は、形式は唐制に倣っているのだが、発給手続きは実態に即していないのである。

夙に指摘されているように、この唐制に倣った五位以上位記の書式は、嵯峨天皇による唐風の儀礼整備の一環として、弘仁九年（八一八）に、公式令の勅授位記式が、「漢様（唐風）」に改められたものである。⁽²⁰⁾この年には、五位以上位記だけではなく、天下の儀式、男女の衣服、宮殿諸堂・諸門の門号も唐風に変更されたが、これらの政策はいずれも菅原清公の進言によるものであった（『続日本後紀』承和九年（八四二）十月丁丑条＝菅原清公薨伝）。菅原清公は、幼少より経史に通じ、二〇歳で文章生となり、遣唐判官として延暦二十三年（八〇四）に入唐、翌年帰国した。その延暦の遣唐使の帰国報告に、「貞元二十一年＝八〇五）二月十日監使高品宋惟澄、領_二答信物_一来。兼賜_二使人告身_一」とあり（『日本後紀』延暦二十四年（八〇五）六月八日条）、同じ時に菅原清公と同じく遣唐判官として入唐した高階遠成が実際に唐で賜った勅授告身が、『朝野群載』巻二〇異国に載せられている。⁽²¹⁾

日本国使判官正五品上兼行鎮西府大監高階真人遠成

右可中大夫試太子中允、余如故

勅、日本国使判官正五品上兼行鎮西府大監高階真人遠成等奉其君長之命、趨我会同之礼、越溟波而万里、謙万物於三陟、所宜褒獎、並錫班榮、可依前件

元和元年正月廿八日

中書令_闕

中書侍郎平章事臣鄭綱宣

中書舍人臣盧景亮奉行

奉

勅如右、牒到奉行

元和元年正月 日

檢校司空兼侍中使

門下侍郎平章事黃裳

給事中登

月 日時 都事

左司郎中

吏部尚書_闕

吏部侍郎宗儒

吏部侍郎_闕

尚書左丞平章事_{在中書}

告日本国使判官正五品上兼行鎮西府大監高階真人遠成 奉

勅如右、符到奉行

主事榮同

員外郎次元

令史摠初

書令史

元和元年正月日下

日付は貞元二十一年の翌年、元和元年（八〇六）正月付であり、高階遠成は大使らに遅れて、翌年に帰国し、その際に授けられたものと思われる。制授告身ではなく、勅授告身であり、先に唐の告身によって復原した勅授告身式に一致する。

判官（三等官）であった高階遠成が勅授であったことを考えると、おそらく大使（藤原葛野麻呂）は制授であったと推測され、このときの大使が賜った制授告身が、弘仁九年の五位以上位記式の参考にされた可能性があると思う。

『朝野群載』卷一二内記に載せる、寛治三年（一〇八九）藤原公実位記は、位記の書式のわかる早い実例として知られているが、『延喜式』の五位以上位記式と一致する。つまり唐の制授告身式に倣っているのだが、これを『朝野群載』は「勅授位記」と記している。書式としては、唐の制授告身式＝日本の『延喜式』五位以上位記式＝日本の勅授位記式（弘仁九年以降）ということになる。

従二位藤原公実

右可正二位

中務、靖恭在位、僉望惟諧、慶賞脩鐘、仰惟令典、
宜増榮光、以穆朝弊、可依前件、主者施行

寛治三年正月十一日

中務卿 闕

中務大輔 闕

中務少輔従五位上臣藤原朝臣基頼宣奉行

正二位行大納言臣忠家

正二位行大納言兼陸奥出羽按察使臣実季

正二位行権大納言兼民部卿皇后宮大夫臣経信

正二位行権大納言臣師忠

正二位行権大納言臣雅実

正二位行権中納言臣基長

……（権中納言六人略）等言

制書如右、請奉

制付外施行、謹言

寛治三年正月十一日

制可

月日辰時、正五位下行主殿頭兼大外記博士伊与権介中原朝臣師平

左中弁季仲

摂政太政大臣従一位朝臣

左大臣正二位朝臣

右大臣正二位兼行右近衛大将朝臣

内大臣正二位兼行左近衛大将朝臣

式部卿 闕

参議正三位行左大弁兼勘解由長官式部大輔匡房

正三位行式部権大輔兼若狭守正家

告正二位藤原朝臣公実、奉

制書如右、符到奉行

正五位下行式部少輔兼大内記在良

少録忠任

少録良貞

少録義貞

寛治三年正月十一日下

この書式は、以後そのまま継承されていく。通説では、実物として残る最も古い位記は、『公名公記』（『管見記』のうち）永享二年（一四三〇）正月六日条にみえる、記主の正三位藤原公名に従二位を授

ける位記とされている⁽²²⁾。先述したように、実際には最古の位記は、九世紀半ばの円珍の位記なのだが、僧侶ではなく官人の位記としては、この十五世紀前半の藤原公名の位記が最も古い。

公名の位記は、日記本文に「叙位儀、依^ニ昨日主上御衰日^一延引。今日於^ニ摂政直廬^一被^レ行^レ之。執筆中山宰相中将定親。直廬之時毎度参議執筆也。…後日、自^ニ内記局^一送^ニ給位記^一之間続^レ之」とあって、その本文の後ろに位記そのものが貼り継がれている。紙幅の都合でここには載せないが、寛治三年（一〇八九）藤原公実位記と全く同じ書式である。

十五世紀末に東坊城和長が編んだ『内局柱礎抄』には、内記による位記の作成についての詳細な記述があり、『延喜式』に規定する位記の具体的な作成手続きや故実が確認される⁽²³⁾。そして、十六世紀・十七世紀以降、多くの位記の実例が残るが、いずれも『内局柱礎抄』に合致することが指摘されている⁽²⁴⁾。九世紀初めに唐風に変更された位記の書式は、『延喜式』に規定され、実態とは乖離したまま、その書式のみが忠実に再現されつづけたのである。

③ 円珍の位記（その1）

——伝燈住位・満位・法師位・大法師位位記——

以上、唐の告身と日本の位記の書式とその変遷についての概略をみてきた。これを踏まえて、円珍の位記について、まず、伝燈大法師位位記・伝燈法師位位記・伝燈満位位記・伝燈住位位記の四通一巻をみてみよう⁽²⁵⁾。

そもそも僧の位記については、天平宝字四年（七六〇）七月に、大僧都良弁らが僧位の制度について奏上した際、「三色師位（伝燈・修行・誦持の法師位）并大法師位、准^ニ勅授位記式^一、自外之階、准^ニ奏授位記

式^一」（『続日本紀』天平宝字四年七月庚戌条）とあるように、一般官人の位記に准じることが想定されていた。

良弁らの申請は、四位十三階を求めるものであったが、煩雑であるとして修正が加えられており、平安前期の段階では、僧位は、下から順に伝燈入位・伝燈住位・伝燈満位・伝燈法師位・伝燈大法師位の五段階であった（「修行」によって位を授けられる場合は「伝燈」を「修行」に代える）と考えられる。『延喜式』玄蕃寮70判授位記式には、「満位以上（満位・法師位・大法師位）勅授、入位以上（入位・住位）判授」とあり、奏授に准じることを申請していた僧位のうち、満位は勅授となり、入位・住位は僧綱による判授とされている。そして、『延喜式』では、勅授にあたる満位・法師位・大法師位の位記は内記式に規定され、判授である入位・住位の位記は、玄蕃寮式に規定されている。

さて、円珍の四通一巻の位記は、承和四年（八三七）の伝燈住位位記から嘉祥三年（八五〇）の伝燈大法師位位記までが左から右に順に貼り継がれている。平安前期の五段階の僧位のうち、円珍の位記は、伝燈住位以降のすべての位記が残っていることになる。このうち、伝燈住位位記のみは、「僧綱之印」が押された僧綱判授である。

僧綱

僧 円珍 年廿三 閏五 延暦寺

今授伝燈住位

承和四年七月廿二日

大僧都伝燈大法師位豊安 威儀師伝燈大法師位信証

少僧都伝燈大法師位泰景 威儀師伝燈法師位金雄

少僧都伝燈大法師位

律師伝燈大法師位慈朝

權律師伝燈大法師位延祥

律師伝燈大法師位
律師伝燈大法師位

「僧綱之印」は六顆捺されており、『延喜式』玄蕃寮70判授位記条の書式に一致し、一般の官人の場合の判授位記に相当する。

判授位記式

僧某年若干歳若干 某寺

今授伝燈入位

年 月 日

僧正位名

威儀師位名

大僧都位名

威儀師位名

少僧都位名

律師位名

玄蕃寮式の書式は、伝燈入位を授けるものであるが、先述のように、入位と住位はともに僧綱判授であるから、書式としては同じくなる。また注目したいのは、この書式が、公式令18判授位記式を僧バージョンにしたものとみなせる点である。公式令の判授位記式の「太政官」を「僧綱」にし、「大納言」以下の署名を僧綱らの署名に変えただけの書式で、「今授某位」という表記は一致する。唐の制授告身式や日本の五位以上位記式が「右可其位」とするのと異なり、むしろ公式令の書式に近い。次に、伝燈満位・伝燈法師位・伝燈大法師位の位記には「天皇御璽」が押され、これらは勅授位記に相当する。承和十年（八四三）の伝燈満位の位記は、次の通りである。

勅

伝燈住位僧円珍年卅一 延暦寺

今授伝燈満位

承和十年七月五日

「天皇御璽」は五顆捺されている。勅授位記に相当するとはいえ、唐の判授位記式に倣った日本の五位以上位記式とは異なり、極めて簡略である。この書式は、『延喜式』内記12僧尼位記条の規定と一致する。

勅

某位僧名年若干 某寺

今授某位

年 月 日

『延喜式』の規定であるが、「今授某位」とする表記は、公式令の書式と同じことに注意しておこう。つづく承和十三年（八四六）の伝燈法師位の位記は、形式がやや異なる。

伝燈満位僧円珍年卅六 延暦寺

今授伝燈法師位

勅、棲山一紀、殊制法式、克

忍艱洪、已遂其期、業

履精勤、道心冲邈、令

加褒進、以勸後侶

承和十三年十二月廿六日

円珍の年齢と歳の数には問題があるが、ここではそれには立ち入ら

ない。この位記の書式は『延喜式』内記13延暦寺位記条の規定によっている。

延暦寺棲山一紀僧位式

某位僧名 年若干 延暦寺
騰若干

今授某位

勅云々

年月日

「一紀」は十二年のことで、最澄は『顕戒論』下四六「開示住山修学期十二年明抛」において、比叡山に棲んで十二年（一紀）修学すれば、必ず効験があることを論じている。⁽²⁶⁾「今授某位」とあるのは、公式令の位記式や『延喜式』内記12僧尼位記条と同じであるが、「棲山一紀」の修学を称揚する勅詞が記されている点が、特徴である。

四通の最後（卷子の上では冒頭となる）、嘉祥三年（八五〇）の伝燈大法師位記は以下のようなものである。

勅

伝燈法師位円珍 年四十 延暦寺
騰廿

今授伝燈大法師位

嘉祥三年六月十六日

「天皇御璽」は五顆捺され、この書式は、先の伝燈満位と同じく、『延喜式』内記12僧尼位記条の書式と一致する。

以上、みてきたところでは、この四通一卷の円珍位記は、いずれも『延喜式』の規定に一致する。すなわち、玄蕃寮70判授位記条、内記12僧尼位記条、内記13延暦寺位記条に一致する。そして「今授某位」とい

う書式である点、「右可某位」という書式をとる弘仁九年（八一八）に改訂された五位以上位記式とは異なることが確認されるのである。

ところで、この円珍の伝燈大法師位記はもう一通ある。章を改めて、「中務位記」と称されるもう一通の伝燈大法師位記をみてみよう。⁽²⁷⁾

④ 円珍の位記（その2）——「中務位記」——

「中務位記」は、紙ではなく白地菱形文の綾に書かれ、「内侍之印」が一二顆捺されている。日付は、先の嘉祥三年六月十六日付位記の約一年前にあたる嘉祥二年六月二十二日である。

延暦寺天台宗伝燈法師位円珍

右可伝燈大法師位

勅、棲山一紀、涉獵三
藏、業履精勤、道心沖
逸、宜加褒進、式光禪
門、可依前件、主者施
行

嘉祥二年六月廿二日

中務卿四品兼行常陸国太守臣時康親王宣

從五位上中務大輔臣並山王奉

從五位下守中務少輔臣橘岑範行

「今授某位」ではなく「右可某位」とし、勅詞（勅、棲山一紀、涉獵三藏、……）が記され、中務省の官人の宣・奉・行がある。

この位記で中務省の官人として宣・奉・行を担っている時康親王・並山王・橘岑範が、揃って中務卿・中務大輔・中務少輔であったのは、先

行研究の検討に明かなように、嘉祥三年（八五〇）五月甲午から仁寿二年（八五二）正月壬午までの間である。⁽²⁸⁾従って、「中務位記」の嘉祥二年六月ではありえず、先にみた四通一巻の伝燈大法師位記の嘉祥三年六月十六日が正しい日付であるとするべきである。

この「中務位記」については、東京国立博物館所蔵の円珍充内供奉治部省牒に残された円珍自筆の識語に言及がある。⁽²⁹⁾

治部省牒は、嘉祥三年三月二日付で、伝燈大法師位円珍を内供奉十禪師に補任するものである。しかし円珍が伝燈大法師位になったのは、嘉祥三年六月とみるべきであるし、治部省牒の方に署名している治部少輔の藤原関雄も、治部少輔に補任されたのは嘉祥四年二月八日であるから（『日本文徳天皇実録』嘉祥四年二月辛亥条）、この治部省牒が作成されたのは、嘉祥四年二月八日以降であるとみななければならない。三善清行が延喜二年（九〇二）に撰した円珍の伝記『天台宗延暦寺座主珍和尚伝』には、「明年（嘉祥四年）春、……有別勅、補内供奉十禪師」とあり、また内供奉十禪師に補任されたことに對する円珍の謝表（『寺門伝記補録』巻一「謝充内供奉表」）は、嘉祥四年三月九日付である。故に円珍が内供奉十禪師に任じられたのは、嘉祥四年三月初めであつたと考えられる。

そして、この治部省牒に、円珍は以下の識語を記しているのである。

我任三十禪師一時、只有官省施行符、元来不給牒身之驗。仍円珍入唐之日、奏請蒙給牒、右大臣藤原大閣下（藤原良房）、尽力勞給之。大唐高官無人不愛、皆抄取之。温州刺史・越州副使、並写取此公驗及中務位記。覽者知元。円珍記。

この識語によると、円珍は内供奉十禪師に任じられたが、こうした任官の場合は通常、施行の「符」のみがあつて、公驗となる「牒」がない。

そのため、入唐の際に特別に願ひ出て―右大臣藤原良房の尽力もあつて―治部省牒（公驗）を發給してもらつたという。これを携えて唐に向かつたところ、大唐の高官たちが皆これを入つて書き写し、温州刺史や越州副使らもこの「公驗」と「中務位記」とを写し取つたというのである。

たしかに任官の場合、日本では「任符」が發給される。⁽³⁰⁾この任符は着任先官司（赴任先の国）や関係諸官司への通達であつて、関係諸機関に所藏され、本人の身分証明にはなりえない。そこで、円珍は自身の公驗となる治部省牒の發給を申請したのであろう。そしてこの治部省牒「公驗」と「中務位記」とが唐で高く評価されたことをわざわざ識語として書き記したのである。

円珍が入唐の勅許を得、藤原良房から砂金三十兩を賜つて、京を出て大宰府に向かつたのは、仁寿元年（＝嘉祥四年）四月十五日であつた（『行歷抄』など）。おそらくその直前に、治部省牒とこの「中務位記」の發給を求めたものであろう。

さて、ここで注目すべきは、この「中務位記」の書式である。

二通の伝燈大法師位記について検討した小山田和夫は、「中務位記」の書式は、『延喜式』内記13延暦寺位記条と同14五位以上位記条とを「合わせた異例の様式」と指摘する。⁽³¹⁾しかしこの書式は、実は先に復原した唐の勅授告身式の、施行手続き部分を除いた勅そのものとはほぼ一致する。煩をいとわず、勅授告身式の勅書部分と比較してみよう。

「中務位記」は、この勅書の書式に施行文言「主者施行」をつけたものといえる。ちなみに、『北山抄』六備忘略記・謚号事に、謚号の場合であるが、「弘法大師・禪觀僧正時、勅書無主者施行之文、依不レ下諸司、於智証大師時、有此文、依有贈位一歟」とある。「中務位記」の場合も、諸司に下したためこの文言が加わつたのであろう。「中務位記」には「内侍之印」が捺されており、中務省の官人が署名した勅

【勅授告身の勅書部分】

具官封姓名

右可某官

勅云々、可依前件

年月日

中書令具官封臣姓名宣

中書侍郎具官封臣姓名奉

中書舍人具官封臣姓名行

【中務位記】

延暦寺天台宗伝燈法師位円珍

右可伝燈大法师位

勅云々、可依前件、主者施行

嘉祥二年六月廿二日

中務卿四品兼行常陸国太守臣時康親王宣

従五位上中務大輔臣並山王奉

従五位下守中務少輔臣橋岑範行

書を綾に写し―おそらくは書の巧みなものに写させ―、施行文言をつ
け、内侍が印して、発給したとみることができるのではないか。

つまり、この「中務位記」は、唐の勅授告身に倣った書式でわざわざ

用意されたものだと考えられる。伝燈大法师位の位記は、本来『延喜式』

内記12僧尼位記条の書式によって発給されるもので、実際にその書式

で出されたものが、三井寺に残る四通一巻の位記のうちの伝燈大法师位

位記であったのだが、入唐にあたって、唐風の位記Ⅱ「中務位記」を作

成したものとみることができる。唐の勅授告身は、日本の遣唐使が持ち

帰っており（先掲『朝野群載』卷二〇異国所収の高階遠成勅授告身など）、

参考にすべきものは多かつたであろう。

⑤ 諡号勅書

「円珍贈法印大和尚位并智証大師諡号勅書」（諡号勅書）は、他の円珍
の位記とともに、もと園城寺に伝わった後、北白川宮家の所有となり、
現在は東京国立博物館に所蔵されている。円珍の没後、三十六年がたった
延長五年（九二七）に、醍醐天皇が円珍に法印大和尚位と智証大師の諡
号を下賜した際の勅書（位記）である。円珍の弟子にあたる増命がこの

年十一月十一日に亡くなり、その増命の遺奏により、増命に静観僧正を
賜ると同時に円珍に大師の諡号を賜ったものである（図1）。

天台座主少僧都法眼和尚位円珍

右可贈法印大和尚位号智証大師

勅、慈雲秀嶺、仰則

弥高、法水清流、酌之

寧尽、故天台座主

少僧都円珍、戒殊

無塵、慧炬有照、渡

大瀛而求法、騁異域

而尋師、濟物為宗、泛

舟楫於苦海、利他在

意、加斧斤於稠林、

是以、蒙霧斂其翳

昧、朗月增其光明、遺

烈永伝、余芳遠播、追

憶志節、足以褒崇、

宜贈法師大和尚位

謚号智証大師、可依

前件、主者施行

延長五年十二月廿七日

三品 行中 務卿 敦實親王宣

從四位上行中務大輔源朝臣国潤奉

從五位下行中務少輔源朝臣興平行

奉

勅如右、牒到奉行

延長五年十二月廿七日

參議從四位下守治部卿兼讃岐守当幹

治部大輔 闕

參議正四位下行左大弁兼讃岐權守悅

告法印大和尚位智証大師、奉

勅如右、符到奉行

大録 闕

治部少輔從五位下公彦

少録茂倫
少録直幹

延長五年十二月廿七日

縹色の料紙を三紙継ぎ、表面には「天皇御璽」（内印）が一三顆捺されている。紙の継ぎ目二か所の裏には、二顆の内印が捺されていたが、現在はぎとられ、表の巻末に移して貼付されている。紙は美しい縹色を現在も保っているが、『延喜式』内記15位記装束条には、「僧都已上准三位」とあり、三位以上の位記の装束は「縹紙」であるのと一致する⁽³²⁾。そして、書式は『延喜式』内記11僧綱位記条と一致する。

僧綱位記式

某位名

右可某位

勅云々、可依前件、主者施行

年月甲日

中務卿位姓名宣

中務大輔位姓名奉

中務少輔位姓名行

奉

勅如右、牒到奉行

年月乙日

治部卿位名

治部大輔位名

左大辨位名

告某位名、奉

勅如右、符到奉行

大録名

治部少輔位名

少録名

年月丙日下

⁽³³⁾ 注目したいのは、この僧綱位記が、唐の勅授告身に近似することである。例えば、唐の永泰元年（七六五）金剛三藏勅授告身など（『不空三藏表制集』卷一所収）と極めてよく似ている。ただし、勅授告身の門下省から尚書省への送付・受理にあたる部分がない。中務省から治部省に直接送られて、治部卿・治部大輔と左大弁の署名を経て、符が発給される形式をとる。勅授告身の形式をとりつつ、実際の発給手続きによる書式で作成されているといえる。『延喜式』内記11僧綱位記条は、唐の勅

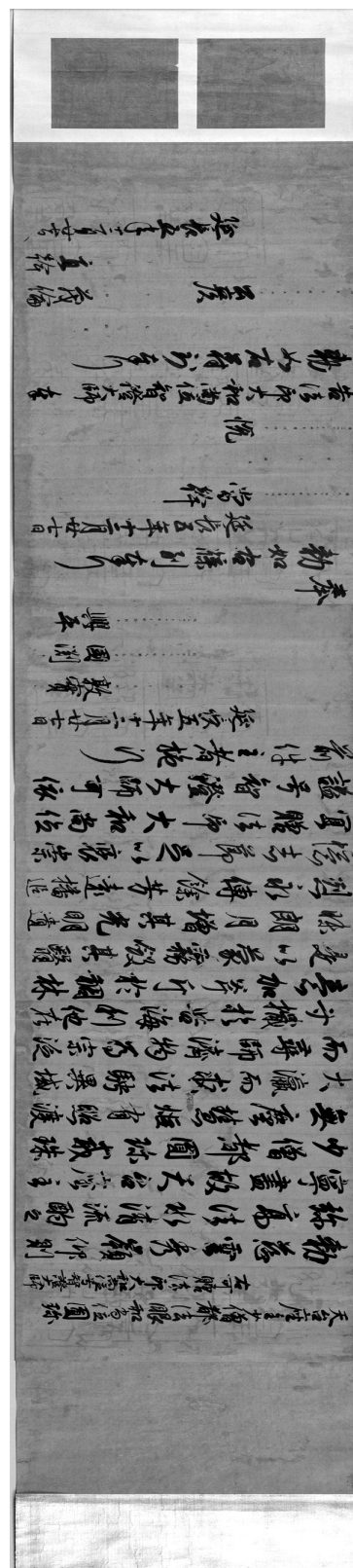


図1 円珍贈法印大和尚位并智証大師諡号勅書

出典：Colbase (<https://colbase.nichin.go.jp/>)

授身式に倣いつつも、実態に即し、一部簡略化した書式で規定されたということになる。

さて、諡号勅書には、十二月廿九日付の門人らの賀書がついており、その奥に「勅書、民部大輔藤原博文、賀書、大学頭大江維時作 延長六年二月十六日記畢」とあって、勅書の文を作ったのは藤原博文であることがわかる。また『帝王編年紀』延長五年条には（十二月）廿七日に「賜^三諡号静観、因^レ茲、静観之師円^一同賜^二大師号^一、智証大師是也入滅以後、宣命道風書^レ之」とあって、「宣命」を小野道風が書いたとする。「宣命」は勅書とは別物である可能性もあるのだが（宣命を別途出すことはありうる）、道風はこの時、少内記であったから、勅書の起草には関わったと考えられるし、当事者に下す諡号勅書を依頼されて書いた蓋然性は高い。そして近接する時期（翌延長六年十一月）の道風の真筆とされる「屏風土代」（三の丸尚蔵館蔵）とその筆致が極めて似ていることから、道風の数少ない真筆として認知されている。

ところが、夙に川瀬一馬が、書風から、「尊円法親王の時代を通過し

てゐるが如き趣が存する様に私考せられる」と述べ、十四世紀以降に書かれたものである可能性を指摘し、近年、湯山賢一は古文書学的検討により、後世の臨書であると主張している⁽³⁶⁾。

書風についてはひとまずおき、湯山がこれを延長五年の諡号勅書の原本ではないとする古文書学的な根拠は、まとめると、以下の通りである。

1 位記は卷子として発給されるものであるが（そして現状は卷子であるが）、子細に本紙を観察すると白界とされてきたものは、折界と考えられ、卷子装ではありえない。

2 書式として、全体のバランスが異容である。他の円珍の位記とは異なり、本文（勅詞）の書体の大きさが際立っており、位署書部分も、官人の署名は本文と同じ大字で、位署部分と宣・奉・行は著しく小さく、「我が国の公文書の中では管見の範囲においても全くの異例といえる様式の文書である」。

3 公文書であるにも関わらず、行書体に過ぎる。

4 内印の捺し方について、奈良時代の公文書は全面に捺されてい

た。九世紀以降は必ずしも全面に捺されることはないが、捺し方が杜撰である。

5 延長四年二月十三日民部省符の内印とは、印影が異なると判断される。

1については、私はこれまで指摘されてきた通り、白界（押界）とみてよいと思う。経年の傷みは甚だしく、継ぎ目裏の内印もはがしてあるが、卷子装であったとみて問題はない。また5については、かつて川瀬の指摘を受けて、太田晶二郎が謚号勅書に押された「天皇御璽」（内印）を、延長四年二月十三日民部省符に捺された内印を実見して比較し、同印と判断している。⁽³⁷⁾太田はこれをもって、謚号勅書が延長五年の原物とみて間違いないことを証している。印影については、太田と湯山のどちらによるべきか判断に迷うところがある。

しかしながら、最も重要な古文書学的な根拠とされる2・3・4については、現存する唐（及び宋）の告身と比較するならば、根拠とはなりえない。

まず、2の位署書部分の官位（官銜）部分が「極小」であり、「官人の位署書としてはほとんど意味をなさない」との指摘であるが、これは、例えば、ブリティッシュライブラリー所蔵の唐の天宝十四載（七五五）秦元制授告身（*S.3392*）や台北の国立故宫博物院所蔵の大暦三年（七六八）朱巨川勅授告身（徐浩の書とされる）をみると明らかのように、告身の官位（官銜）部分は極小に書かれるものである（図2 告身全文・図3官銜署と官位署部分の拡大図）。⁽³⁸⁾台東区立書道博物館所蔵の著名な顔真卿自筆の勅授告身（「自書告身帖」）も同様である。⁽³⁹⁾

「全くの異例といえる様式の文書」ではなく、唐の告身を正確に模した書式といえるのである。

3の「行書体に過ぎる」という指摘については、入唐のために詠えられた「中務位記」が流麗な書体で書かれていること、その書が唐で高い

評価を得たことを想起すれば、疑問とするには当たらない。位記は能書によって書かれることもありえたとみるべきである。謚号勅書は、勅書部分には中務省に、治部省符が加えられたものは治部省に原本がとどめられ、その写しが寺に下されるのであり、その際、能書がこれを清書したというのは十分ありえる。

そもそも位記を能書が書くというのは、これも唐の顔真卿自筆の告身の事例がある。顔真卿は、唐中期の著名な政治家であり書家である。顔真卿自筆の告身は、吏部尚書であった彼が太子少卿に任じられたときの勅授告身であるが、自筆ということに疑問がもたれていた。しかし大津透は、近年発見された北宋天聖令の雑令・不行唐13条に、告身を自ら写したり、親族が写すことについて規定があることを指摘し、これが顔真卿の真筆であることの信憑性が高まった。⁽⁴⁰⁾著名な能書でなくとも、現存する唐代の告身が流麗な筆致で書かれていることは、夙に知られているところである（例えば前掲秦元制授告身など）。

そして、最も重要なのは、4の印の捺し方である。謚号勅書の印は、冒頭部分と年紀部分、それに施行文言部分（と継ぎ目裏）という限定された箇所には捺されている。これを湯山は捺し方も含めて「杜撰である」と指摘する。確かに印は重なって捺されたりしており、杜撰とみえるが、冒頭部分、年紀部分と施行文言（告詞）部分に限定して捺すというやり方は、唐代の告身の捺印の仕方と一致する。⁽⁴¹⁾朱巨川勅授告身の全文の写真をあげておこう（図2）。

この朱巨川告身には、伝世の名書跡の常として、歴代の蔵書印が捺されており、本来の印（「尚書吏部告身之印」）と紛らわしいところがあるが、印が、冒頭部分（「某、右可某官」）、年紀部分、施行文言（告詞）にのみ捺されていることがわかるであろう。もともと、唐代の告身は「勅」字の上には捺印しないという原則があったようであるが、日本ではそうした法則はなかったようである。

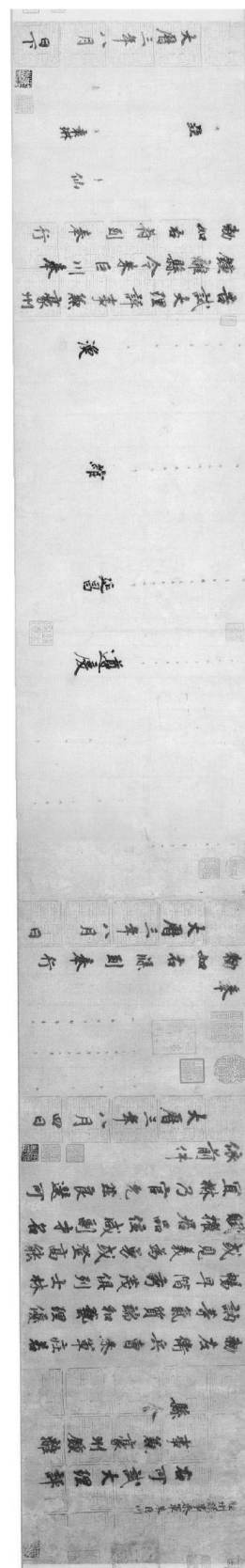


図2 朱巨川勅授告身 出典：台北・国立故宫博物院「書画典藏資料検索系統」(painting.npm.gov.tw/)

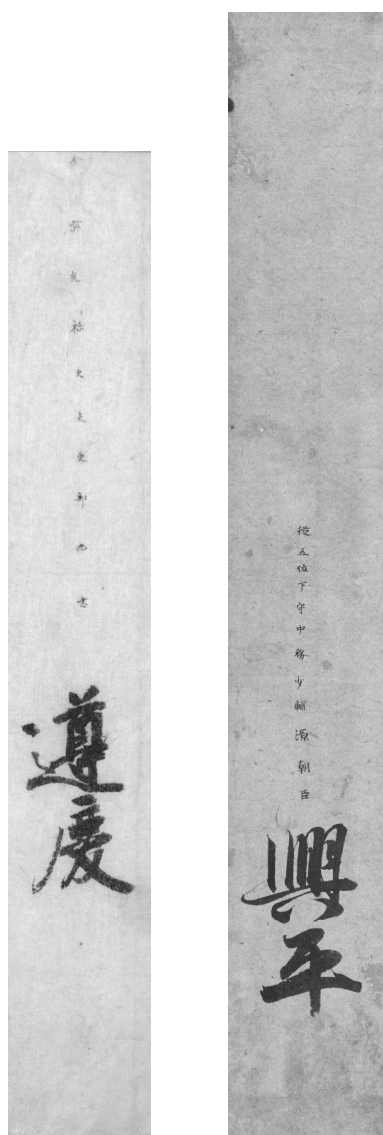


図3 左・朱巨川勅授告身部分(官銜署部分)と
右・円珍諡号勅書部分(官位署部分)

出典： 左・台北・国立故宫博物院「書画典藏資料検索系統」
(painting.npm.gov.tw/) をもとに切り抜き
右・Colbase (https://colbase.nichi.go.jp/) をもとに切り抜き

つまり、謚号勅書は、官位（官衡）部分の極小の書き方、印の捺し方を含め、唐代の告身と見事に同じ「かたち」をしているのである。このことは、謚号勅書が、古文書学的には、全く問題なく、発給された当初の原本であることを示す。むしろ後世に原本を臨書したものに後から天皇御璽を捺すことの方が不自然であろう。そして、この謚号勅書を能書が書したとするなら、その能書が小野道風であることは最も蓋然性が高いといえるであろう。

おわりに

養老公式令に規定された日本の位記が、唐公式令の告身の書式を簡略化したものであること、弘仁九年（八一八）に改定された位記が、唐の告身の形式に近づけたもので、それが『延喜式』五位以上位記式に定着したことは夙に指摘されてきた。

本稿では、まず日本の五位以上位記式＝勅授位記式は、唐の勅授告身式ではなく、制授告身式を継受したものであること、『延喜式』に規定する僧綱位記式が、唐の勅授告身式に類することを指摘した。

ついで、園城寺（三井寺）と東京国立博物館に所蔵される謚号勅書を含む円珍の一連の位記が、日本古代の位記の原本として最古であることに着目し、『延喜式』玄蕃寮70判授位記条、内記11僧綱位記条、内記12僧尼位記条、内記13延暦寺位記条と一致することを確認した。また内記12僧尼位記条、内記13延暦寺位記条の書式は、「可某位」ではなく、「授某位」の書式をとる点で、弘仁九年の位記式改定以前の「かたち」を残していることに注意を向けた。

また後世の臨書とする説もある謚号勅書は、印の捺し方や官位署の書き方など、その「かたち」が唐代の勅授告身と一致すること、つまり後世の臨書説は、古文書学的には成立しないことを述べた。日本の古文書

の書式について考えるとき、日本の古文書だけを検討していたのでは思わぬ誤りに陥ってしまうことがある。日本の古文書は、中国の古文書の書式を継受したところから始まっている。中国を中心とする東アジアの古文書との比較研究、とくに、文書原本の比較研究が必要である所以である。

遣唐使が唐で賜与されて持ち帰った告身によって書式が変更されたと考えられることや、円珍が唐に赴くにあたって唐風の位記が申請・発給されていること（そしてその書が唐の高官から称賛されたことを特記していること）からも、日本の位記が、あくまでも唐の告身の形式——「かたち」——を重視していたことがうかがえる。

十世紀半ばの『西宮記』などの儀式書によると、位記は中務省の内記があらかじめ作成し、それを上卿が天皇に奏聞、請印し（「天皇御璽」を押印）覆奏して本人に授与するものであった。つまり書式と発給手続きの実態は異なっていた。であれば、文書発給のシステムがどう変化しようが、書式はそのままに発給することが可能である。

日本においては、中世以降、位記とは別に、略式の「口宣案」による位階の授与が行われるようになるが、一方で正式な位記は中世・近世を通じて発給されつづけた。位記は身分証明のための最も重要な文書であったため、九世紀初めに成立した唐風の文書形式のままに存続したのである。

中国においても、宋代の告身は、実態に即して書式を変更させつつも、唐代の告身の「かたち」はそのまま継承していた。⁽⁴³⁾また朝鮮半島において、高麗の告身は、書式は唐に倣うが、制授告身（大官誥）は宰相職、勅授告身（小官誥）は文武三品以上に適用され、あくまで告身は特例であつたらしい。⁽⁴⁴⁾唐の告身は、実態とは別に、東アジアの身分証明の文書形式——権威の「かたち」——として永く機能したのである。

註

- (1) 伊藤東崖『制度通』は、近年、礪波護・森華校訂『制度通』1・2（平凡社東洋文庫、二〇〇六年）が出版された。なお、中国の告身は、官（官職）の授与に際して給付された公文書で、辞令書であり身分証明書でもある。南北朝期には出現し、隋・唐を経て宋代以降は「誥命」とも称された。それに対し、日本の位記は、位（位階）の授与に際して給付された。時野谷滋が論じるように、中国における品（官品）は官の等級を示すものにすぎず、日本の位（官位）とは本質的に異なる。日本の官位は、官職と位階との二本立てであり、位は栄典であって、冠位から発達した（時野谷滋「唐の官品令とわが官位令」『律令封祿制度史の研究』吉川弘文館、一九七七年）。それゆえに、中国と異なり、位の授与こそが身分を証明するものとなったのである。
- (2) 内藤乾吉「唐の三省」（『中国法制史考証』有斐閣、一九六三年、初出一九三〇年）、同「敦煌出土の唐騎都尉秦元告身」（前掲『中国法制史考証』、初出一九三三年）、仁井田陞「唐宋法律文書の研究」（東方文化学院東京研究所、一九三七年）、同「唐宋告身の現存墨蹟本に就て」（『書苑』二二一、一九三八年）、瀧川政次郎「敦煌出唐公式令年代考」（『支那法制史研究』有斐閣、一九四〇年、初出一九三二年）、同「唐の告身と王朝の位記」（前掲『支那法制史研究』、初出一九三二年）。
- (3) 大庭脩「唐告身の古文書学的研究」（『唐告身と日本古代の位階制』学校法人皇學館出版部、二〇〇二年、初出一九六〇年）。大庭脩「唐告身と日本古代の位階制」には、他に「龍谷大学所蔵吐魯番出土の張懷瓘告身について」「建中元年朱巨川奏授告身と唐の考課」「敦煌発見の張君義文書について」「魏晉南北朝告身雜考―木から紙へ―」「隋唐の位階制と日本」を収録している。同「遣唐使の告身と位記」（『古代中世における日中間係史の研究』同朋舎出版、一九九六年、初出一九六〇年）も参照。
- (4) 小島浩之「中国古文書学に関する覚書（上）」（『東京大学経済学部資料室年報』、二〇一二年）及び同「唐代公文書体系試論―中国古文書学に関する覚書（下）」2（小島浩之編『東アジア古文書学の構築―現状と課題』東京大学経済学部資料室、二〇一八年）。また中国では、趙鼎「論日本中国古文書学研究之演進―以唐代告身研究為例―」（『三尺春秋 法史述経集』中国政法大学出版社、二〇一九年、初出二〇一四年）が小島の論文を紹介しつつ、同様の指摘を行っている。
- (5) 丸山裕美子「唐代之告身与日本之位記―古文書学視角的比較研究」（黄正建主編『中国古文書学研究初編』上海古籍出版社、二〇一九年）では、日本の位記と中国の告身を古文書学的な視点から比較し、その概略を示した。
- (6) 円珍の位記は、園城寺編「園城寺文書一」（講談社、一九九八年）にすべての写真が集成されている。また『国宝三井寺展』（毎日新聞社等、二〇〇八年）に伝燈法師位記・伝燈大法師位記と「中務位記」「円珍贈法印大和尚位并智証大師諡号勅書」の鮮明なカラー写真が掲載されている。
- (7) 諡号勅書は、前掲註（6）書その他、二〇一三年に東京国立博物館で開催された「和様の書」展や、二〇一九年に同じく東京国立博物館で開催された「王羲之を超えた名筆」展にも出展されている。図録により色目やや異なるが、「文化遺産データベース」<https://bunkaidai.jp/db/heritages/>や「e 国宝国立博物館所蔵 国宝・重要文化財」www.emuseum.jp/で鮮明な画像をみることができる。
- (8) 湯山賢一「筆跡論への視角」（湯山賢一編『文化財と古文書学 筆跡論』勉誠出版、二〇〇九年）。
- (9) 読売新聞東京版二〇〇九年三月二十八日夕刊など。
- (10) P.819の画像は、フランス国立図書館の電子図書館Gallica <http://gallica.bnf.fr/>で確認できる。なお裏は「王績文集」である。
- (11) 仁井田陞「唐令拾遺」（東京大学出版会、一九八三年、初版は一九三三年）五五九―五六三頁。仁井田陞著・池田温編集代表「唐令拾遺補」（東京大学出版会、一九九七年）七―四頁では、中村裕一「唐代制勅研究」（汲古書院、一九九一年）による告身の事例検討により、一部修正が加えられている。
- (12) 前掲註（2）内藤「敦煌出土の唐騎都尉秦元告身」『中国法制史考証』五二頁、前掲註（3）大庭「唐告身の古文書学的研究」『唐告身と日本古代の位階制』四九―五七頁など。
- (13) 日本令は、日本思想大系「律令」（岩波書店、一九七七年）による。大庭脩は、この冠の賜与から位記の授与への変化を、単に文書主義の貫徹という意味ではなく、古代的色彩を脱皮する象徴的な出来事としてとらえている（前掲註（3）大庭「唐告身と日本古代の位階制」三三六頁）。
- (14) 彌永貞三「大宝令逸文一条」（『史学雑誌』六〇―七、一九五一年）。
- (15) 例えば、『西宮記』（神道大系本）恒例一「正月五日叙位儀」、恒例二「四月位記請印事」「位記召給」、「北山抄」（神道大系本）卷六「位記請印事」など。
- (16) 前掲註（2）・註（3）の内藤・仁井田・瀧川・大庭論文、及び中村裕一の一連の著書（前掲註（11）『唐代制勅研究』、『唐代官文書研究』中文出版社、一九九一年、『唐代公文書研究』汲古書院、一九九六年）を参照。この他に個別研究として、陳祚龍「敦煌写本『洪弁・悟真等告身』校注」（『敦煌資料考』上、一九七九年、初出一九六二年）、朱雷「跋敦煌所出《唐景雲二年張君義勅告》―兼論“勅告”制度淵源」（『敦煌吐魯番文書論叢』甘肅人民出版社、二〇〇〇年、初出一九八二年）、王永興・李志生「吐魯番出土汜德達告身校

- (17) 旅順博物館の告身は、郭富純・王振芬『旅順博物館蔵西域文書研究』（万巻出版公司、二〇〇七年）による。
- (18) 前掲註(2) 内藤「敦煌出土の唐騎都尉秦元告身」『中国法制史考証』五七頁、註(3) 大庭「唐告身の古文書学的研究」『唐告身と日本の古代の位階制』五三～五七頁など。
- (19) 条文番号・本文は、『訳注日本史料 延喜式』中(集英社、二〇〇七年)による。以下に引用する『延喜式』の文(内記式、玄蕃式)はいずれもこれによる。
- (20) 前掲註(2) 瀧川「唐の告身と王朝の位記」『支那法制史研究』二二五～二二六頁など。
- (21) 『朝野群載』は新訂増補国史大系本を使用。ただし、国史大系本には、誤読、誤字が多く、一部訂正している。「左中書」↓「在中書」など。『朝野群載』には、卷二内記に位記の書式が載せられており、後掲の「勅授位記」の他、神位記書様、僧綱位記書様、僧尼位記書様と位記例状旨が載せられている。
- (22) 『公名公記』(「管見記」のうち)は宮内庁書陵部所蔵。F11ののうち、永享二年正月は卷三六、一巻。
- (23) 『内局柱礎抄』は群書類従・公事部に所収。
- (24) 遠藤珠紀「足守木下家文書に残る三通の位記の再検討」(『日本歴史』七七八、二〇一三年)、長村祥知「中世風の位記」「菊亭家文書」寛永五年正月藤原宣季叙正二位位記(『京都文化博物館研究紀要』二五、二〇一三年)など。
- (25) 円珍の位記については、小野勝年『入唐求法行歴の研究』上(法蔵館、一九八二年)や佐伯有清「智証大師伝の研究」(吉川弘文館、一九八九年)、同「円珍」(吉川弘文館(人物叢書、一九九〇年)などにももちろん触れられているが、内容の紹介と「延喜式」の書式に一致することについて述べるにとどまっている。なお園城寺には円珍の位記の他に、嘉祥三年(八五〇)正月九日付の興福寺の僧靈鎮の住位位記(僧綱判授位記)がある。関連して、石山寺蔵「行歴抄」裏書には嘉祥三年付の唐留学僧円珍の伝燈大師位位記もみえるが、本稿では紙幅の関係もありふれない。また円珍の位記のうち元慶七年(八八三)三月廿六日・廿四日の「法眼和尚位位記并勅書案」についても、今回は検討の対象とはしない。
- (26) 『顯戒論』は日本思想大系「最澄」(岩波書店、一九七四年)による。なお最澄は弘仁九年(八二八)八月二十七日付の「勸奨天台宗年分学生式」(「山家学生式」八条式)において、住山十二年の修学を終えた学生には法師位または法師位を賜うことを要請している。
- (27) 「中務位記」については、専論として、小山田和夫「中務位記と治部省牒」(『智証大師円珍の研究』吉川弘文館、一九九〇年)がある。
- (28) 前掲註(25) 佐伯「智証大師伝の研究」四四五～四九頁、註(27) 小山田「中務位記と治部省牒」『智証大師円珍の研究』一六八～一六九頁など。
- (29) 前掲註(6)「園城寺文書一」や「国宝三井寺展」図録・解説に「円珍添書」として写真が載せられている。この添書については、渡辺滋「任官関係文書に見る当事者主義」(『日本古代文書研究』思文閣出版、二〇一四年)一〇九～一一〇頁を参照。
- (30) 任符については、前掲註(29) 渡辺「任官関係文書に見る当事者主義」に詳しい。日本ではもともと任符の発給は、国司(地方官)の場合に限られていた。他に、早川庄八「八世紀の任官関係文書と任官儀について」(『日本古代官僚制の研究』岩波書店、一九八六年、初出は一九八一年)、西本昌弘「八・九世紀の内裏任官儀と可任人歴名」(『日本古代儀礼成立史の研究』塙書房、一九九七年、初出は一九九五年)、佐々木恵介「古代における任官結果の伝達について」(『日本古代の官司と政務』吉川弘文館、二〇一八年、初出は二〇〇三年)も参照。
- (31) 前掲註(27) 小山田「中務位記と治部省牒」『智証大師円珍の研究』一六五～一六六頁。
- (32) 「延喜式」内記15位記装束条は以下の通りである。
- 凡装束位記式
神位記三位已上者、縹紙、緑紙、緑縹、黄楊軸。親王位記者、白紙表、白裏、綾裏、紫羅襪、緑綾裏、雜綺帶、赤木軸。三位以上者、縹紙、緑紙、緑縹、黄楊軸。五位以上者、白紙、白縹、帛帶、厚朴軸。女亦同、但僧部已上准三位、位、律師准五位。
- (33) 前掲註(2) 瀧川「唐の告身と王朝の位記」『支那法制史研究』二〇五～二〇九頁は、僧綱位記式について、開元二十五年令の制授告身式によったものとする。瀧川は、前掲敦煌出土の公式令断簡を開元七年令とし、後掲顔真卿自筆の告身を制授告身と判断して、これを開元二十五年令の制授告身式によるものとするが、顔真卿の告身は勅授告身とみるべきである。
- (34) 『扶桑略記』延長三年(九二五)八月廿三日条に「少内記小野道風」とみえる。なお小野道風書とされる延長六年十一月の「屏風土代」(三の丸尚蔵館蔵)に、

保延六年（一一四〇）十月に藤原定信がつけた跋文においても「小内記小野道風書之」とある。

- (35) 川瀬一馬「古写本の鑑定」『日本書誌学之研究 続』（雄松堂書店、一九八〇年）三三五頁。

- (36) 前掲註（8）湯山「筆跡論への視角」『文化財と古文書学』一五〇―二九頁。

- (37) 太田晶二郎「智証大師諡号勅書の内印」『太田晶二郎著作集』三、吉川弘文館、一九九二年、初出は一九八五年。

- (38) S3392の画像は、IDP (International Dunhuang Project) のホームページで確認できる。官衙部分は、拡大しないと見えないくらい極小である。朱巨川勅授告身は、さしあたって故宮書法新編六「唐玄宗書鵲鶴頌 唐徐浩書朱巨川告身」（国立故宫博物院、二〇一一年）など。これも台北の国立故宫博物院的「書画典藏資料検索系統」painting.pnp.gov.tw/で画像をみる、ことができる。

- (39) 顔真卿自筆の勅授告身は、前掲註（7）「顔真卿―王羲之を超えた名筆―」展図録などで鮮明な図版をみることができる。他に、熊本県立美術館所蔵の北宋・熙寧二年（一〇六九）司馬光勅授告身―宋代のものではあるが―なども参考になろう。司馬光告身は、二〇一九年の国立歴史民俗博物館の企画展「日本の中世文書」に鮮明な写真パネルが展示され、図録にも掲載されている。

- (40) 大津透「カパー写真解説」顔真卿自書告身」（大津透編『日唐律令比較研究の新段階』山川出版社、二〇〇八年）。表紙に顔真卿自書告身の写真が使われている。

- (41) 口宣案については、富田正弘「口宣・口宣案の成立と変遷」『中世公家政治文書論』吉川弘文館、二〇一二年、初出一九七九・八〇年）を参照。

- (42) 中国では、北宋・南宋の告身がいくつも残るが、いずれも唐代の告身の書式を継承している。南宋の告身を検討した清水浩一郎は、南宋建炎三年（一一二九）制度改革の結果、中書門下省と尚書省が並立することになり、その制度の変遷が文書様式に反映されたことを指摘する（清水浩一郎「南宋告身の文書形式について」『歴史』一〇九、二〇〇七年）。一方、小島浩之は、制度の実態と文書様式が乖離してきたことに注意を促す。小島浩之「南宋告身二種管見―併論・インターネット情報と歴史学研究―（漢字文献情報処理研究会『論集…中国学と情報化』好文出版、二〇一六年）は、近年中国のオークションに出品された二種の南宋の告身、乾道二年（一一六六）司馬俊勅授告身と淳熙五年（一一七八）呂祖謙勅授告身について詳しい考察を加えた。そして、三種の北宋の告身（司馬光勅授告身、司馬光制授告身、范純仁制授告身）についての検討も踏まえ、北宋・元豊の官制改革以降、中書門下併合によって、中書門下と尚書の二段階に文書様式が変化したことを論じる。その上で、様式は確かに変化しているが、三省制度が大きく変わっているにも関わらず、なお全体として唐代の書式によった告身が発

給されていることに注目し、実例として残る文書から、帰納的に文書の発給手続きを復元することには慎重であるべきだとする。近年出土し、紹介された南宋の『武義南宋徐謂礼文書』（中華書局、二〇一二年）の検討も踏まえ、告身の時代による変化については再検討する必要があるが、小島の指摘は、日本の位記の書式の変遷を考える上でも示唆に富むと思う。

- (43) 高麗の告身については、矢木毅「高麗国初の広評省と内議省」及び同「高麗時代の銓選と告身」『高麗官僚制度研究』京都大学学術出版会、二〇〇八年、初出はともに二〇〇〇年）を参照。高麗では一般官僚の任免は「制牒」「教牒」（唐の勅牒に倣う）が用いられ、略式のものとして「批」「判」が常態化していたとされる。

（愛知県立大学日本文化学部・国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇二〇年一月二七日受付、二〇二〇年四月九日審査終了）

A Comparative Study of Priest *Enchin's* 円珍 *Iki* 位記 and Tang *Gaoshen* 告身

MARUYAMA Yumiko

The official documents of ancient Japanese *Ritsuryō* 律令 state were established by inheriting the Tang China document systems.

In this paper, I focus on “*Iki* 位記” regarding the establishment and development of official document systems in ancient Japan. The format of Japanese *Iki* was established by imitating the format of Tang “*Gaoshen* 告身”. Japanese *Iki* and Tang *Gaoshen* are identification card, and are material that can follow the international comparison of old documents and follow the changes over time. I consider the monk’s *Iki*, which has been neglected in conventional position research.

Enchin's Iki held at Onjo-ji Temple (*Miidera* 三井寺) are the oldest *Iki* in Japan. I also pointed out that the “*Chumu-Iki* 中務位記” was specially prepared by *Enchin* who would study abroad in Tang, and that it was formatted according to Tang *Gaoshen*.

The Imperial Record of Posthumous Promotion and Conferring of Epithet on Priest *Enchin*, which was written by *Ono no Tofu* 小野道風, owned by the Tokyo National Museum is also a kind of *Iki*. In recent years, the format has been questioned, but the “shape”, such as the way of stamping and the writing of government offices, is consistent with the Tang *Gaoshen*, and is undoubtedly paleontological. Looking at only Japanese ancient documents would lead to unexpected errors. This is why a comparative study with ancient documents in East Asia, especially China, is needed, especially a comparative study of original documents.

Key words: *Kushiki-ryō* 公式令, *Engi-shiki* 延喜式, *Enchin's Iki*, The Imperial Record of Posthumous Promotion and Conferring of Epithet on Priest *Enchin*, Tang *Gaoshen*